

「衝突」コーディネートに共感

完璧かみまに調和のとれたコーディネートはたしかに美しい。赤などのさし色を採り入れつつも黒やベージュで全体をバランスよくまとめあげた、万人に好感を与える品よい装い。靴とバッグがおそろい、なんてキメられちゃった日にはもうひれ伏さざるをえなくなる。

ただ、偽装、取捨疑惑など、人間のせい裏面を見せつけられる報道が続くためか、そんな正しい完成美がうそくさく見えることがある。代わって、なにやら胸騒ぎがする装いとして目に留まりはじめたのが、モード誌のスナップ欄で増殖中の、調和を無視したちぐはぐコーディネートである。

代表格が女優のサラ・ジェシカ・パーカーやモデルのアギネス・デインなど。柄ものハイソックスにピンヒールの靴、ひらひらのドレスにじつ靴、といった、良識的には疑問な組み合わせを冒險的にやって驚かせ、胸のすくような新しい魅力を強烈に印象づける。

このちぐはぐ美が、「クラッシイ (classic)」と呼ばれはじめた。クラス (class) 上流階級) 感があるのではなく、クラッシユ (classic) 衝突する) からの造語。雑多なテイストが1人のなかで衝突するファッションに、なぜ今、共感を覚えてしまうのか? 思い描いた夢と食い違ふ、シビ

中野香織の — コロモのココロ —

アな現実。難民を救う慈善パーティーに出るための新しい靴に浪費する、意味不明の人道主義。ブランドのエコバッグを幾重にも包装してもらって買う、滑稽なエコ志向。そんな矛盾だらけの現実や筋が通らぬ自分へのツツコミを、調和なきスタイルのなかに読みこみたくなってくるのかもしれない。

しかもリサイクルショップの掘り出し物をつぎはぎしたような実験的コーディネートは、環境に配慮してモノを大切にする最先端グリーンファッションにも見えてくる。衝突は惨事ではなく、新しい価値を生むチャンスという希望まで抱かせる、「クラッシイ」スタイル。マネしてもただのへんな人に見ええない、わがセンスの欠如には絶望するのだが。(服飾史家)